

校長室だより

No. 23

平成29年10月13日(金)

強く やさしく

六ツ美中部小学校校長

かとうよし かず  
加藤嘉一

## しゃもじ

先日、市民体育祭の反省会に出席させていただきました。  
(六ツ美中部学区は総合得点でブロック5位、小学生が出場したバージョンはブロック優勝するなど、輝かしい成績もあり、楽しく和やかに会が行われました。) その会で、体育委員さんが企画してくださったビンゴ大会があり、わたしの獲得した賞品は「しゃもじ」でした。



このしゃもじは優れものです。プラスチック製で表面に突起がたくさんあり、ご飯がしゃもじにくっつかず、使っているときも洗うときも苦勞しません。それだけでなく、しゃもじの平たい面には空洞があり、洗米するときに手で米をとがなくても、かき混ぜていれば隙間部分から適度に水が通り抜け、手をぬらすことなく済むというものです。水仕事の多い調理担当者にとって、また、どうしても手が使えない状況にある方にとって、大変便利な品物です。

「必要は発明の母」という言葉があります。不便さをとらえ改善したいという思いから生まれる発明は、人間の知恵を駆使して社会へ貢献するものであり敬服します。反面、いつもこうした便利品を見ると、まだ自分のなかで解決できない二つの悩みが頭をもたげます。少し考えが古いかもしれませんが。

一つは、わたしが一番悩みを持つ「我慢する力」についてです。便利さとともに失われる「じっと待つ」「今ある状況を受け入れる」「我慢する」「嫌なことから逃げない」という力が、果たして今子供たちに養えているのか。高齢者の多くの方々と60歳以下のわたしたちとの間でもその力の差を感じることがあります。もちろん、今の時代は何十年も前と異質のストレス要因や環境があります。また研究が進んだおかげで、身体的な個性の違いのように、発達障害など、表面には見えない個性の違いがあることも明らかになり、人を十把一絡げに考えることは非常識になりました。生まれた環境や文化の違い、不登校、いじめ、自殺の問題も深刻です。多様性を受け入れることが教育です。相手の状況を知らずに「我慢しなさい」という言葉を安易に使うことは少なくなった気がします。

もう一つは、AIに代表されるようにIT産業の発展です。グローバルな社会・世界の中で日本は勝ち残っていけないという話をよく聞きます。この大人の世界の改革が、子供たちの育ちの面でどう影響していくかということです。つい先日も、祭礼で2歳くらいの子供がぐずり始めたときに、すかさずその子の目の前に

スマートフォンが登場し、画面であやされていく姿に出会いました。こうした光景が現れたことは、5年前に保育園の園長先生から教えてもらっていました。わたしも、今なら自分の子供がぐずり始めたとき、同じことをするでしょう。

アナログで対応していたことが、「必要」の裏でどんどん減ってきます。これがいいかどうか。こうした変化は、テレビのない時代に育った方々からすれば、「何言っている。お前たちもテレビを見て育ったことで、それまでと違うことができなくなっているだろう」と言われるかもしれません。

しゃもじの発明に拍手を贈ります。でも、わたしの悩みはもやもやしたままです。

### 学芸会に向け願うこと3年目

10月は校内、市内での行事が目白押しです。子供は、きっと一番楽しい季節でしょう。学校では、その10月の最も大きな行事が「学芸会」です。

学芸会に取り組むと、国語、音楽、図工、特別活動、総合的な学習などで培いたい力等、教科の力に加え、表現力・思考力等を伸ばすことができます。これまでの3年間、子供たちの大好きなこの学芸会で、以下のようなことを大切にしてお取り組んでほしいことを伝えてきました。

2年前「ことばと体をつないで、表現してほしいこと」

1年前「間（ま）について真剣に考え、表現を考えること」

これらの視点を考えて演技や演奏をすることで、ぐっと伸びる力があることをねらっています。今年ももちろんこの2つを大切にしながら、集会で次のことを子供たちがんばるよう伝えました。

今年『学芸会で、こんなことができるようになりたい』と言えるものを、  
一人一人が決めて取り組んでほしいこと」

4月の始業式で、わたしは「今年授業でがんばってほしいことは、「博士の眼」をもつようにすること」という話をしました。「博士の眼」とは、今は何が課題（目標）かを自分で考え、取り組む目です。学芸会でもただ行事があるから取り組むのではなく、

- ① 自分ができるようになりたいことをきちんと決め、
- ② そのためにどうしたらできるようになるかを考え続け、
- ③ 実際にやってみて、
- ④ 友達や先生に聞きながら何度も試行錯誤し、
- ⑤ 自分なりの納得のいくものに近づけ、
- ⑥ その学びを振り返ること



ができるようにしてほしいのです。学芸会でも「博士の眼」をもってがんばってほしいと思います。